3-3.永福町～西永福～浜田山（昭和60年）

建設省国土地理院「1/10000地形図」

東京の古道・人見街道

浜田山の改札を出て駅前商店街から井の頭通りに出ると、人見街道との分岐点がある。人見街道は東京の古道の一つで、浜田山駅前から久我山、三鷹を抜けて府中に至り、府中市で新小金井街道とつながる。南北軸が幹線だった中世武蔵国では数少ない東西軸で、下総の国府（現在の千葉県市川市）への下総街道の道筋だったとも。

南北朝時代、足利尊氏が新田義興・善宗兄弟との武蔵野合戦で敗れた時、この人見街道が逃走路だったと伝えられる。江戸時代に甲州街道が整備されると、脇街道的な性格を強めて「府中道」などと呼ばれている。

浜田山の起点から10分ほど歩くと、右手に曹洞宗松林禅寺がある。豊臣時代に入った文禄2年（1593）開創の古刹であり、境内に入って左手に六地蔵や庚申塔が保存されている。いずれも江戸初期から中期にかけてのもので、その中の一つ、笠付き庚申塔は、刻字は肉眼では若干判読しにくいものの像容がくっきり残っている。

庚申の本尊である「青面金剛」、足許に抑え付けている天邪鬼、庚申につきものの「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿も明瞭だ。庚申塔の石形や彫られる神像、文字などは様々だが、庚申塔の王道を行くようなものが風化に耐え、残されているのは珍しいケースらしい。

人見街道の標識

浜田山は松本清張が長く住んだことで知られる。清張邸は浜田山と高井戸の中間地点、京王井の頭線の線路際で、住所は高井戸東になる。

松本清張は昭和28年、朝日新聞東京本社に転勤となると、荻窪で間借り生活を始める。翌年、一家が上京。当初は練馬区関町の借家に住んでいたが、昭和32年に石神井に転居。昭和36年、浜田山に居を構えると終生、この地で幾多の名作を生んでいる。

浜田山に居を移してから間もなく発表したものとして『わるいやつら』『砂の器』『けものみち』『天保図録』等々がある。

浜田山駅から井の頭通りを結ぶ商店街

とから、いつしか「浜田山」の名で呼ばれるようになっていったそうだが、町名としての浜田山は新しい。昭和44年の住居表示で、上高井戸、下高井戸の一部が区割りされて浜田山町が誕生している。

浜田山と松本清張

浜田山の地名は、江戸時代、現在の浜田山周辺の一帯が内藤新宿の米問屋「浜田屋」の山林であったこ

西永福の駅は永福町駅と800メートルほどだが、西永福の駅前寺院が「火伏の大黒天」で知られる法華宗理性寺（永福3-56-29）。創建は江戸時代の承応3年（1654）。家康時代からの股肱の家格である大久保忠辰・忠陰兄弟が両親の菩提を弔うために創建した。元々は内藤新宿四谷大木戸にあったが、大正3年に移転してきた。

「火伏せの大黒天」と呼ばれる大黒天像は日蓮の作といわれ、近隣火災の折、火災の時に大団扇をもって現れて、火災を防いだという伝承が「火伏せ」の由来となっている。

赤い山門の理性寺

埋設したもの。和泉給水所はその中継点の一つだった。